



Title	ヴェルツブルクでのソクラテック・ダイアログに参加して
Author(s)	中岡, 成文
Citation	臨床哲学. 2001, 3, p. 120-129
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8287
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヴュルツブルクでの ソクラテック・ダイアログに参加して

中 岡 成 文

2001年2月22日

院生の堀江剛さんとフランクフルト空港から電車でヴュルツブルクに到着。ユーリウス・シュピタールというワイン醸造元でもあるレストランで食事していると、今年は異常に暖かいと地元の人が語っていた。しかし、時差のため早朝5時に目がさめて外を見ると、少し雪が降っていた。

2月23日（金）

SDの会場になる学術研修施設アカデミー・フランケンヴァルテに電車とバスを乗り継いで向かう。ヴュルツブルク中心部から川を渡って山側、マリーエンベルク城のさらに向こうに位置する。坂道をバスで登っていくと、そこここに消え残っている雪が見えるが、現在はきれいに晴れてかなり暖かい。到着してすぐ、今回の主催者であるディーター・クローンに紹介される。その後、99年にオックスフォードで面識をもったウーヴェ・ニッチュがやってきたので、挨拶する。堀江さんは昨夏にロックムで兩人とは会っているの、親しそうに接している。

グループ分けとSDの全般的説明 夕食後、クローンの司会で自己紹介とグループ分けが行われる。日本人は堀江さんと私の二人、あとはオーストリアからの3人を含めてすべてドイツ語を母語とする21人か、と思っていたら、名簿で住所がベルリンとなっていたうちの1人はトルコ人だとわかった。

自己紹介のあとクローンが次のような趣旨の発言をした。幾人かの参加者は（ソクラテス的対話の）進行役になりたいという希望を表明したが、協会が進行役として認定するための条件がいくつかある。現在は30人ほどの進行役がいるが、自分を含めてみな名誉職として活動している。つまり無報酬で。昨夏のロックムにも20カ国から

100人を越す参加者があって、すでに「対話」の国際化を示していたが、今回も日本から2人参加してもらっているのは光栄なことだ。さて、「対話」にはいくつかの決まりがある。そのひとつとして、「君」と、相手の姓ではなく名を呼ぶように心がけてほしい。つぎに、SDは共同の熟慮であるから、他の人の発言に正確に耳を傾けて genau hinhören ほしい。さらに、自分の立場を定式化すること——誠実に、他の人が理解できるように、耳触りのよい哲学者の名前など出さないで、自分の具体的経験から出発して。SDは一種の真理をめざすものである。一定の「真理」が存在するかどうかは微妙な面があるが、少なくとも「もっと先に進む」 weiterkommen ことを可能にする手がかりとしては必要である。以上が私がメモしているクローンの発言要旨である。

SDのグループにはドイツを中心として伝統を守ろうとする人々と、オランダなどより積極的に街に出て活動するタイプがあると聞いていたが、ドイツ人であるクローンは決して狭量ではない。たとえば彼は公式のプログラムのあとの私的な談話を重視していた。じっさいその晩、ワイン・シュトゥーベ（セルフ・サービスでビールやワインを飲めるスペースが研修所内にしつらえてある）で、参加者がほとんど全員集まって、夜中近くまで談笑した。「君」を使ってほしいといわれていたが、このような私的な会話では知らない同士はむしろ「あなた」で語りあっている。

2月24日（土）

9時15分から1回目のセッション開始。私のグループは協会の指導者の一人ホルスト・グロンケを進行役とし、「他人の幸福にどう貢献するか」をテーマとするグループで、私を含め（グロンケを除き）7人から成る。ただし、メンバーの一人であるトルコ人のサビールは対話の記録（プロトコル）を取ることに専念するので、対話には実質上参加できない。

ホルストは次のように前置きした。対話のために2日半の時間があるが、これは長いとはいえない。そのため、自分の方からときどき「構造化」を提案することがあるが、反対があれば言うてくれればいい。今日は具体的な経験を述べ、それを分析するところまで行きたい。そして明日はそれを抽象化する道、より一般的なものへ通じるように努める。

サビールが記録を取っているのを見て、私はどれくらい詳しく記録するのか尋ねた。彼はホルストから与えられた用紙を示した。基本的には、対話の内容に関すること、進行役の決定、対話の集団力学（「緊張している」など）を記入するらしい。ホルストがいうには、以前は対話の最中に参加者がメモをとることは許されなかった。対話に集

中しなさい、というわけだ。しかし、メモをとることが参加者の思考を深めるのに役立つという理由で、今は許されている。

導入 (Einstieg) そのあと2枚のカードが配られた。緑色の方には、「私は～です」「私は～をしています」と書いてあり、空白のところを埋めるのだが、その際2人ずつが組になってお互いに質問をして、相手のカードに自分が（その人のことを）記入してあげる。たとえばグドルンは私に職業や家族、趣味などを質問したあと、「私（中岡）は職業に満足しており、哲学の本や漫画を読むのが好きで、泳ぐのも好きだ」と記した。そのカードは順番に前のボードにピンで刺され、各自はカードをもとに自分のパートナーの簡単な紹介をした。以上は対話に入る前のウォーミングアップといえる。

具体的経験の語り＝①知覚の段階 続いて、対話の第一段階に入った。テーマに関して各自が自分の具体的な体験（「例」）を語るのである。SD進行に関するホルストの5段階分類（後述）では、第一段階の「知覚」にあたる。つまり、今回のテーマ（幸福）に関連する実生活の1アスペクトを切り取ってくるということである。私は精神分裂症を病んだ友人を泊め、翌日一緒に海へ遊びに行った体験を話した。彼にとっては「幸福」だっただろうが、自分は疲れた一方で、彼の役に立ったのはうれしかったという体験である。こうして全部で6つの体験（「例」）が提出され、それぞれをホルストが簡潔に定式化した。一部繰り返しになるが、私の例なら、「旧友と海に旅行した。それは彼には幸福だったが、私にはどちらともいえるものだった（その意味では「2つに割れていた」Zwiespältigkeitとホルストはまとめた）」という具合。

②知覚の分析 その後先ほど配られた2枚目のピンクのカードに、先ほどとは別のパートナーを選んで質問しあいながら、記入した。今度のカードは、「例」「なに」「どんな幸福」「どの他人」「どんな役に立ったか」という5つの欄に区切られていたが、「なに」の欄は空白のまま置いておくようにホルストは指示した。このカードを使って、先ほど各自が提出した「例」を分析するわけで、SDの第二段階に入ることを意味する。「分析」をペアを組んでやるところが面白い。5つの欄に区切ったカードを使うというのは、効率的に時間を使うための工夫である。今回は私はイエナ（旧東ドイツ）から来たアネッテと組んだ。ちなみに彼女の「例」は、以前の親しい仲間だったヘーゲル哲学の専門家がドイツ再統一後は大学にも勤められず、孤独に過ごしているので、仕事を世話しようとしたが、彼はかえって引きこもってしまったというもの。私もヘー

ゲル哲学を専門にしてきたが、旧東ドイツの政治状況の厳しさを知らされた。

このセッションの締めくくりとしてホルストは、SDの段階を5つに分け、1. (生活世界に基づく) 知覚 Wahrnehmen、2. 知覚の分析ないし組織化 Artikulieren/ Systematisieren、3. それについての判断 Urteilen、4. 判断の分析 Urteile analysieren、5. 分析の妥当性についての判定ないし根拠づけ Geltung beurteilen/ begründenの5段階があること、このセッションまでに短時間ながら第2の段階まで終わったことを参加者に知らせた。SDの歩みをこのように整理するのは、私には初耳で興味深かった。

3時30分から午後のセッションが開始された。その前に午前中の幸福に関するカードを（場合によっては再考し、書き直して——ホルストは vertiefen して、と表現した）各自が前にピンで留め、同じ内容を多少簡略化して全員の例が上下に並ぶ一覧表が作成され、みんながそれを見ながらその後の対話が進められるようになっていた。私は、「友人が暴力を振るう可能性があったので、その危険を予防する」という点、およびそれが「私自身の自己感情 Selbstgefühl に貢献した」という点を「どんな幸福」の欄に付け加え、さらにこの第2点に関連して「どの他人」の欄に「私自身」を付け加えた（「他人」という表現にはそぐわないが）。

さて、このように各人の「例」が表現的に確定したことを受けて、いよいよどの例をグループとして選択し、それに集中的に取り組むかを決定することになった。もっともホルストは、折に触れて他の例ないし経験にも立ち返っていくとはっきりと予告した。どのような「例」が選択されるにふさわしいよい例かについて、彼はいくつかの基準を紹介した。たとえば、いつ起こったかがはっきりしている (datierbar) こと、他のテーマではなくまさに当該のテーマにぴったり合っていること、例を提出した本人がそれについて詳しく語るのに気分的に負担が多くないことなどである。ホルストのこの説明を受けて、一人一人がこれだと思う例を、1つないし2つずつ推薦した。ヴォルフガングは私の例が多面的であるとして推薦した。私はお返しにというわけではもちろんないが、ヴォルフガングの例を推薦した。彼の例は、幼い娘が幼稚園でのカーニヴァルの仮装の模様が夜寝る前に自分に語ってくれたこと、それをきっかけにユーモアに満ちた謎解き遊びが展開され、娘が大声で笑ったことを内容としているので、以前の自分の子どもたちとのやりとりを思い出して私にとって追体験しやすかったからである。それと同時に、もうひとつ、アネッテの例もヘーゲル専門家である（あった）自分には面白いという理由で推薦した。

こうして推薦が一回りしたあと、ホルストは「中岡とヴォルフガングに推薦がほぼ集中しているようだ。どちらかに決めよう」と発言して、2つに絞るように提案した。

このように進行役がさっさと方向を指示したことに私は軽い驚きをおぼえた。続いて、「簡単な例の方が最後の段階に早く到達できる」と、選択基準に関するアドバイスをを行った。若干の発言のあと、「投票」が行われ、多数決でヴォルフガングの例を選ぶことが決まった。私は自分として初めて Beispielgeber（例の提供者）になり、そして阪大関係者として初めてドイツ語での「例の提供者」になるという機会を逸したわけである。しかし、内心ほっとしたのも事実。ちなみにほぼ同じ時間に、堀江さんは彼のグループの「例の提供者」に選ばれていた！

ホルストは、「今までみんな他の参加者の話によく耳を傾けた *hinhören*、これは例の決定に際してつねに起こることではない、こんなときはよく突っぱね合いが起こるものだから」とコメントした。その後、ヴォルフガングにみんなが質問した。彼の例の解釈（「こう振る舞った方がよかったのでは」などという）に立ち入るのではなく、情報を得る質問に限るようにホルストは助言した。その後詳細に語られたヴォルフガングのエピソードについては省略する。なお、このセッションの間に雪がしんしんと降り始め、窓から見える白樺の風景により幻想性が加わった。

メタ対話 午後 5 時 15 分からはメタ対話（狙いは第 1 にベースになる対話 *Sachgespräch* について、自分がどんな感情を持ったかなどを話すこと、第 2 に SD でこれこれのことがなされるべきである、あるいはなされるべきではないなどと方法論的な議論をすること）が行われた。グドルンが司会を務めることになった。メタ対話で私がホルストに質問したのは、最初全員がそれぞれ提出した経験（例）をホルストはきわめて簡潔に定式化したが、いつも彼はそうにするのかということである。私がオックスフォードで、また日本で参加した SD ではいずれも、全員の経験（例）がもっと詳しく、時間をかけて記述されたからである。私自身はホルストによる自分の例の定式化に満足していたが、アネッテはそうではなく、後から自分で訂正を申し入れていたし、このメタ対話のときも、「以前に自分が参加した SD では例の定式化に満足しているかどうか進行役から尋ねてくれたのに」とホルストに不満を表明していた。他に、「個人的な感情は決定にどの程度入り込んでいいのか」という質問に対して、ホルストが「決定には非合理的な要素はどうしても入ってくる。豪儀な理性 *prunke Vernunft* というわけにはいかない。〈理性もいっしょにゲームに加わるのが許される〉 *Vernunft darf mit einspielen* といいたところだ」と答えたのは、面白かった。

メタ対話の終了後の雑談で、ホルストに、耳を傾ける *hinhören* という言葉を彼が使い、最初の晩にディーター・クローンも使っていたことについて質問した。傾聴に当

たるドイツ語はzuhörenだというのが私のこれまでの認識だったからである。ホルストの答えは、「自分は意識せずに使ったが、2つの言葉の間に違いがあるのは確かだ。hinhörenは、相互理解に問題が生じたときなどに、より注意深く聴くことを意味する」というものだった。そばにいた記録係でトルコ出身のサビールが、「それならhinhörenの方がSDにふさわしい、よい表現ではないのか」と畳みかけたのに対し、ホルストは「ひとはつねにhinhörenするわけにはいかない。zuhörenしていて、ときどきhinhörenするのがよい」と答えた。臨床哲学にとっても示唆の多い指摘であろう。

2月25日（日）

③判断 朝のセッションが開始されるとき、昨日選択されたヴォルフガングの経験が、彼自身によって詳細に定式化されてすでに紙に書き出されており、それが前に掲示されていた。この定式化は、「例4」（4はヴォルフガングの順番を示す）と名付けられた。さらに、「4に対する判断」という文章もヴォルフガングによって用意され、「例4」の下に掲示された。それは、「私はリン（ヴォルフガングの娘の名）の幸福に貢献したが、それは習慣となっている〈晩の儀式〉（お話をしたり等）の枠内で時間と身体的近さを彼女に与えたから(weil)であり、また対話しながら彼女の謎々遊びに応じ、言葉の機知と想像で彼女を笑わせたからである」という内容だった。

④判断の分析 これをもとに「具体的な問いと判断」（ホルストの表現）に移った。まず、上記の「4に対する判断」に向けての問いを立ててみるのである。ここでもホルストは今までの私のSD認識になかった指導をしている。つまりこれまでは、各自が経験（例）を語ったあと、各自がその経験に対応する「問い」を定式化し、つぎにそこから一つの経験（例）と一つの問い（メイン・クエスチョン）を選んだのだが、今回は経験を一つに絞ったあと、それに対する「判断」を経験提供者に定式化させ、それを経て、その判断に対する「問い」を定式化させている。ここで付け加えていえば、紙に書き出す作業を進行役がやるのではなく、ホルストがほとんど参加者にさせていた（何かの理由で手が痛んでいるのも一因だったようだが）のも私には目新しかった。

さて、ヴォルフガングが「判断4に対する問い」として定式化したのは、「どの行いによって私はリンの幸福に貢献したか」というものである。

それを受けて、みんながこの定式化が正しいかどうかを吟味し、修正を提案していく。さまざまな意見が出た。「与えたからであり」というふうに、「から」weilという言い方をヴォルフガングが用いたことへの違和感も多かった。文法も含めた問いと答

えの定式化について細かい議論が交わされたが、日本人の場合にはそこまで言葉遣いを熱心にあげつらえるかどうか。そうこうするうちに、みんな黙り込みがちになった。どうしたらいいのか確信が持てないように見えた。

グドルンが出した修正提案がその後の方向性を示した。すなわち、a)リンは幸福だったか、b)それに私は貢献したか、c)リンが幸福であると私は何をもとに確認できるか、という3つの部分的問いに分割するというものである。

休憩をはさんでさらに対話が続けられ、先のグドルンの提案を補完する形で別の部分的問いが付け加えられた。すなわち、d1)私のとりわけの *besonder* 貢献はどこにあったか、d2)私の間接的 *mittelbar* 貢献はどこにあったか、が先のa)からc)に付加された。その後問題になったのは、d1)の「とりわけの」という表現が曖昧であることだった。ホルストはそこで、「4に対する判断」の中で「〈晩の儀式〉の枠内で *im Rahmen*」という表現が使われていることに注目したらどうかと提案し、「このように提案しても大きな内容的干渉にならないと思うので」と付け加えた。これは正しい介入だったと私は思う。

午前のセッションを締めくくるにあたってホルストがみんなに与えた課題は、昼休みの間に、a)からd2)までの問いを各自の経験(例)に当てはまるように表現し変え、またそれに対する判断も定式化して、それをみんなの前に書き出すということだった。

昼食の時間。インスブルックから来た参加者と話をしていると、ホルストがやってきて、今夜全体会を開くが、そのとき堀江さんと二人で日本のことを話してほしいという。急な申し出で、堀江さんとしばらく顔を見合わせていたが、やらせてもらうことに決めた。ただし、発表の準備(それに加えて先ほど出されたグループの課題もある)で昼休みの休息が奪われてしまうのは明白になった。午後3時30分セッション再開。書き出された各自の経験(例)を見て、そのうちどの箇所が問いa)～d2)に対応するか区別して下線を引いてみなさい、とホルストは要求し、一人ずつ下線を引いて説明した。

⑤妥当性の判定・根拠づけ その後、ヴォルフガングの例に戻った。といっても、彼の例に依拠しつつも、今や今回の出発点であった普遍的な問い「他人の幸福に何を貢献するか」に解答する方向で考えていくのである。さて、今回のテーマ "*Was zum Glück anderer beitragen*" は意図的に不完全な形をとっているため、それを完成させなければならない、とホルストはいった。つまり、日本語に訳せば「他人の幸福に何を貢献するか」となるこのテーマは、「誰が」という主語を欠き、英語で言えば *can* や

must にあたる助動詞を欠いているため、「貢献できる」のか「貢献しなければならない」のかも曖昧である。ホルストの求めに応じてヴォルフガングが定式化した問いは、「私は他人の幸福に何を貢献でき、また私がじっさいに幸福に貢献したことは何をもとにわかるのか」というものであった。

戦略的対話 この問いに対する修正提案がいくつか出てきたところで、ホルストは残りの時間で戦略的対話をしようと言った。次に我々が何をするかについて話し合う対話である。ホルストは最初私に戦略的対話の司会をするよう提案したが、私のドイツ語力ではまだ荷が重いし、夜の私と堀江さんの発表を控えてエネルギーを温存しなかったので辞退し、ルチアが司会を引き受けることになった（しぶしぶ）。

戦略1として、「幸福とはいったい何か」、戦略2として「他人の幸福への貢献とはどのような様子のものであるのか(aussehen)」という問いが掲げられた。参加者はみな疲れてきているようで、対話はかなり散漫になってきた。ある人たち（とくにアネッテ）のしゃべり方が早すぎて、中岡が十分についてこれられないのではないかという指摘が出された。私は100パーセントとはいかないが、本質的なところはわかっているつもりだと答えた。エーリッヒは、いやアネッテの早口は自分も時々理解がむずかしいし、グドルンも声が小さくなって聞き取れないことがあると付け加えた。率直だがユーモアを交えた指摘であった。

ソクラティック・ダイアログの進め方をホルストは「オランダ人の図」で説明した。これはおそらくオランダのホス・ケッセルの提示したもので、砂時計のように上底と下底とが広く、中央部がくびれている。上底は普遍的な問いを指し、ここから出発して具体的な問い、そしてそれに対する具体的な判断へと降りていく（具体的な判断が中央部のくびれに当たる）。そこから下へはまた広がっていき、具体的な判断を支える普遍的な原理（下底）へと到達するという図である。ソクラティック・ダイアログはこのような進行をたどるので、ある一つの例に集中しても普遍的なもの（問いや原理）から離れるわけではない、ということをホルストは主張したのである。逆にいえば、普遍的なことを目指していても、具体的なことを去らないという主張でもある。

全体会における中岡・堀江発表 25日の夜8時から全体会が持たれ、堀江さんと私が臨床哲学と阪大が主催しているSDの模様について報告した。持参した『臨床哲学のメチエ』の最新号がタイムリーにもSD特集で、しかもその表紙に、昨夏SDの国際会議が開かれたドイツはロックムの池で泳ぐ鴨たちの写真があしらってあったことは、

ドイツ圏の人々にもわかりやすく、喜んでもらえたようだ。もちろん『メチエ』の内容もできるかぎりわかってもらえるよう、目次を独訳したうえ、掲載論文・文章への簡単なコメントを添えた。堀江さんもこの号掲載の自分のSD報告を独訳してプリントアウトしたものを持参していたので、それをもとに発表した。私は、このような公的な報告の機会を与えられるとまでは予想していなかったが、臨床哲学についてSD関係者に説明しようと、基本的なことはドイツ語で頭に入れてあったので、急な申し入れのわりには一応報告の体裁は整えられたと思う。質疑応答も活発だった。私と堀江さんの発表の途中でもあちらの人は遠慮なく質問をはさんでくる。臨床哲学のケア班でヘルガ・クーゼの『ケアリング』を取り扱い、「ナースは末期患者の安楽死の要求をサポートすべきだ」という彼女のテーゼを論じていたことは、ドイツ圏の参加者との共通の話題を作る意味でも、また臨床哲学とクーゼら生命倫理学者との違いを示す意味でも、役に立った。

2月26日（月）

いよいよ最終日。朝のセッションがいつもどおり9時15分から始まった。ホルストが最初に昨日のおさらいをして、我々のグループのSDが至っている地点を確認した。

その後、昨日2つ出された「戦略」の問いに付け加えて、それを修正する形で戦略3、4、5の各問いが提出された。その詳細は省略するが、そのうちヴォルフガングが出した戦略3の問いは、「他人の幸福」というとき、他人を単数形で述べていた（Glück eines anderen）。しかるに、出発点でホルストが立てていた問いも、その後の他の参加者の問いも、すべて他人を複数形で述べていた（Glück anderer）。私はそこに違いはないのかと質問した。ヴォルフガングは、いや自分もその点は気になっていた、自分が例をもとに考えていたのは「目の前にいるある特定の他人（彼の例では自分の娘）」だから、とコメントした。いくつかのやりとりが交わされ、問いにおける他人を「ある特定の他人」（eines bestimmten anderen）と表現することが合意された。もちろん、この変更によって視野から失われる対他関係のパースペクティブもある。社会正義などは不特定の他者をめざすものだから。しかし、少なくともヴォルフガングの例が選択された以上、問いを「ある特定の他人」に絞るのが得策だとみんなに思われたのであろう。最終的な問いは、「いかなる種類の貢献を私はある特定の他人の幸福のためになしうるのか」という形に整えられた。

この問いに答えるために、「人格的出会い」「創造性」「時を忘れる」「入り込む（eingehen）」など有益と思われるキーワードが多数提案され、ホルストは、「さて、こ

の問いに答えていこう。もはやヴォルフガングの例からは離れ、各自が将来の出会いに役立つと思う方向で」と指導した。時間があればみんなですらに対話を続け、みんなが合意できる答えを見つけるのであるが、それはできないのでとりあえず各自で答えを出してみる、そして家に帰ってその答えが普遍的な答えになりえているかどうかを引き続き吟味するということである。

各人各様の答えが書き出された。私はドイツ語の表現に関してはホルストや他の参加者に助けてもらって、「私はある特定の他人との人格的出会いを準備し、実現することができるが、しかしその出会いを満足のいく終わり方で締めくくるのであるし、またその出会いによって同時にその他人に安全な場所Geborgenheitを提示するのもある」と答えを定式化した。私としては出会いが大切なのは当然として、その出会いがきちんと区切られ、他人のペースを乱すものでないことが重要だと思われたからであるが、時間があれば他の参加者に真意を説明したいところだった。

締めくくり いよいよSDを締めくくるにあたって、ホルストは対話には「核となる真理」Wahrheitskernがあるはず（これは全般的説明のときにディーターも述べていたこと）なので、それをこれから探求してほしいと要望し、最後に「今回の作業をどのように感じたか」「何を学んだか」と各自に問うた。答えのなかで印象に残ったのは、アネッテが、「前回の参加でもそうだったが、今回の成果を持って日常生活に帰ったとき、何が残るかが不安だ」とコメントしたことである。ホルストは、「これまで自分が指導したSDのなかでもっとも集中的intensivで向上的steigerndであった。みんなが自分を信頼してくれてありがたかった」と述べた。参加者を代表してエーリッヒが進行役を務めてくれたホルストへの感謝の言葉を述べ、みんなで買ったワインを贈った。

最後の全体会 こうして各グループでのSDが終了したあと、全員が集まって、自分がこのSDで何を得たかを一言ずつ語った。別室にならべてあったSD関係の図書・資料を買おうと思ったら、阪大の臨床哲学とはすでに昨夏のロックムで取り決めができていたので、無料で持って帰っていいと言われて、びっくり。ホルストがベルリン自由大学で大学教育（ないしは大学教員の再教育）にSDを応用する試みを何度かして、それに関する資料も手に入ったのは大阪大学でも役に立ちそうだ。昼食後、解散。4日3晩寝食を共にしたあと、親密な雰囲気できていたことは事実である。笑顔での握手がそこそこで交わされ、堀江さんはほほえましくもホルストと抱き合って名残を惜しんでいた。